ローマ人への手紙第十六回質問

13 というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。

14 もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます。

15 律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。

16 そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。

（四章一三―一六節／新改訳）

（問一）アブラハムの信仰はひとつの約束に基づいています。パウロはこの約束について、どんなことを言っていますか（13-16節）。

（問二）これはだれに与えられた約束ですか。

（問三）この約束は、なにによって与えられましたか。

（グループ聖書研究・聖書を読む会手引より）

神の救いの約束

（ロマ四章一三―一六節）

律法宗教が人を救わないということは、非常に重要な点で、人間の努力によっては、決して罪から解放されることはありません。人間は相も変わらず、一生懸命に努力をし、そうして天国への階段を上っていけるものと思い込んでおります。金もうけや、立身出世や、この世のことにだけ忙しくしている人は別として、少しく人生をまじめに考える人は、必ず善行を積むとか、難行苦行をすることによって心に平安を得たいと考えます。いくらかでも善いことをして、天国に近づきたいと考えるわけです。こういう考え方が一般的ですから、そういう人間の善行によっては救われないと言うと、全く驚いてしまい、何もしないで救われるというようなことがあり

うるのだろうかと思うわけです。

キリスト教とそれ以外のすべての宗教との根本的な違いの重要な一つの点はここにあると言っていいでしょう。ほかの宗教では、なんらかの形での人間の善行の必要を教え、救いにおける人間の果たす役割の可能性について説きます。しかし、聖書は、人間がどのようにまじめに努力しても、そのことによって救われることは絶対にないのだと教えています。それは、人間が持っている罪によるものです。罪は神に対して責任を持つものですし、自分自身にとっては腐敗堕落して、善行を行なうことができなくなってしまっていますし、世界との関連で見れば、悲惨な状態に陥ってしまいました。このような人間の姿を、聖書では罪人と呼ぶわけですが、いくら努力してみても、神の定めておられる標準には到達できなくなってしまいました。それが、三章二三節で言われているところです。「すべての人は、罪を犯したので、神の栄光を失ってしまった」ということです。ですから、わたしたち罪人が行なうことは、たといそれが本人にとってはどれほど純粋な動機からしたと思っていることも、また真実に行なったと考えていても、実のところ、すべてはむなしい努力にすぎません。

ですから、神はもはや律法を守る力を失ってしまった罪人たちに、その不可能な道を求められることをせず、別の道を用意してくださったのです。もちろん、罪に陥る以前の人間は、神の律法を守ることができましたし、そうすることによって、いのちを持つことができました。しかし、罪に陥って

以後の罪人には、そのような道は断たれてしまいました。そこで、神はイエス・キリストによる救いの道を開いてくださったのです。それは、あくまでも神の一方的な恵みの約束によるものです。ですからパウロは、そのことについて、ここにしるしているわけです。「というのは、世界の相続人になるというアブラハムとその子孫に対する約束は、律法を通してではなく、信仰の義を通してなされている。というのは、もしも律法による者が相続人であるとすれば、信仰はむなしくなり、約束も無効になってしまうからである。というのは、律法は怒りを招くものであって、律法のないところに違反もないからである。こういうわけで、世界の相続人になることは、信仰に根ざすのであり、これは恵みによるためであり、すべての子孫に、すなわち、律法を持つ人々だけにではなく、アブラハムの信仰に従う人々にも、その約束が保証されるのである。」

このように、聖書は、神の約束の書物です。聖書は契約の書物であって、キリストによる一つの救いの契約の二つの面、つまり旧約と新約から成り立っているものです。しかし、わたしたちが普通、契約と言う場合、それは双務契約を意味しますが、この双務契約というものは、そのどちらか一方の不真実によって、破棄、ないしは無効になってしまうものです。ところで、神がわたしたちに結んでくださった契約というものは、このような性質のものではありません。わたしたち人間の不真実性をよくご存じの神は、神と人間とが対等の立場で契約を結ばれませんでした。もし対等の立場で、双務契約

を結ぶとするならば、人間の側の不真実によって、すぐに無効になってしまわなければならないでしょう。そこで、神はご自身の真実性の上に、この契約を結ばれました。ですから、これは契約とは言っても、遺言のような意味を持っていますし、ヘブル人への手紙でも、そのように説明されています。[1] つまり、この契約は、神の祝福の約束にほかなりません。遺言の場合もそうですが、約束というものは、その相手が何かをしたことによって有効になるのではなく、一方的な約束をして、祝福が適用されるものです。

神がアブラハムを通して、与えられた約束というものは、そういう性格のものでした。その神の約束が与えられてから、四百三十年たったのち、律法が与えられたわけで、約束の方が先行しています。それでは、律法の効用はいったい何なのでしょうか。律法によって、罪がわかるというものです。「律法は怒りを招くものであって、律法のないところに違反もない」と言われているのは、そのことです。律法が与えられたのは、人間は結局、律法を守ることができず、いかに罪深い者であるかということを自覚させるためであり、律法を守るように努力しなさいというのではありません。人間は律法を守ることができないのだということを知らせるためだったのです。罪を犯した人間は、そのあらゆる機能が罪によってゆがめられてしまったため、自分では純粋であると思い、また真実であると思っているのに、その結果はみじめなものでしかありません。本人が大まじめであればあるだけ、その悲劇もまた大きいと言わなければなりません。どうして、よ

かれと思ってやったことが、ほかの人を傷つけたり、自分自身苦しまなければならないことになるのかと言えば、結局、人間は罪人であるからです。徹頭徹尾エゴイストの塊であるのに、自分すらそのことを自覚しておりません。ほかの人はともかく、自分だけは正しいと考えたり、自分の思い通りにならないと怒ってしまったりするわがままさが、罪人の現実を現わしています。そしてむさぼりが、わたしたちの本質的な姿です。そのような罪人の姿を知らずに、罪人のままで何か善いと思われることをやってみたところで、それがうまくいくはずがありません。人間が霊的破産者であり、道徳的無能力者であると言うのは、そのことです。しかも、それが人間一般としてそうなのではなく、ほかならぬ自分自身がそうなのだということを認めるまでは、わたしたちは性こりもなく、何度でも善行を積もうとしたり、自己満足的なわざを繰り返しつつ、無益なことをしているでしょう。自分の力によってではなく、神の恵みによって救われるのだということがわかるまで、人間はむだな努力を払い続けるに相違ありません。

聖書はそのように愚かな罪人たちに対して、神の約束に目をとめるようにと勧めています。神の救いの約束は、信じ、受け入れることによって、それを自分のものとすることができます。神の約束しておられるいのちへの道は、ただイエス・キリストによってのみ至ることのできるものです。というのは、イエス・キリストこそ、「道であり、真理であり、いのち」だからです。ですから、キリストを「通してでなけ

れば、だれひとり父のみもとに来ることは」ないのです。

聖書が繰り返し教えていることは、アブラハムとその子孫に与えられた神の祝福の約束は、アブラハムとその血筋による子孫であるユダヤ人に対するものではなく、アブラハムとその信仰の足跡に従う人々に対するものであるということです。一民族の宗教ではなく、全人類の宗教である聖書の宗教の真骨頂がそこに表われていると言っていいでしょう。聖書の宗教は霊的宗教です。一民族だけの宗教でも、現世的ご利益の宗教でも、病気治癒の宗教でもなく、人間の、本質的な問題である罪の解決を真髄とする宗教です。この問題の解決がなければ、いくら現世的ご利益があっても、病気が治っても、そんなことによって人間の根本的な問題は解決されないからです。

パウロは、霊的宗教の原理を主からの啓示によって知りました。そして、その目をもって旧約聖書を見ると、今まで解けなかったことが解けてきたのです。この世の多くの人々が、善行を積むことによって救われ、天国へ行けると考えている間違いを、主が御霊によって示してくださり、ここに霊的開眼をさせていただくことができるなら、どんなにすばらしいことでしょうか。今までわからなかった霊的世界の事情が明らかに見えてまいります。神の救いのみこころがわかり、それを信仰によって自分のものとし、罪の赦しを体験することができます。それは、善行を積むことによって心の平安を得ようとする自己満足ではなく、神による満足にほかなりません。聖書は実にその約束で満ちみちているのです。

注(1)ヘブル人への手紙九章一五―二八節。

(2)ヨハネによる福音書一四章六節　新改訳。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解（ロイドジョンズ・ローマ書講解要約）より